



- 巻頭言『新しい医療を目指して』
昭和大学藤が丘病院 循環器内科 准教授 鈴木 洋
- 『臨床工学技士をご存知ですか』
昭和大学藤が丘病院 臨床工学室 技士長 小林 力
- 『年末年始について—お知らせ—』
- 『医療安全推進週刊の取り組みについて』
- 『藤が丘病院・リハビリテーション病院
ワークショップ報告会について』
- 『クリスマスツリーを飾りました』
- 『税の相談会を行いました』



巻頭言 『新しい医療を目指して』

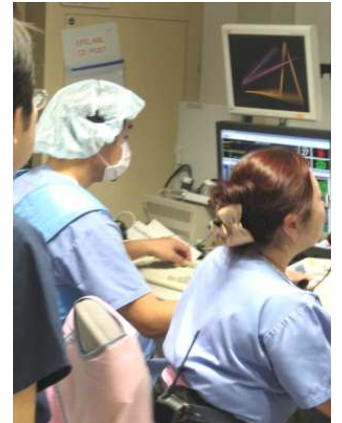


循環器内科
准教授・医長 鈴木 洋

最近の医療の進歩は目ざましく、我々循環器内科（心臓、血管の内科）の領域でも、心臓のみならず、足の血管、腎臓の血管、頸の血管などあらゆる血管にカテーテルを入れて狭くなっている箇所をひろげて流れをよくするという治療法が日々進歩をとげています。また、心房細動という脳梗塞の大きな原因となる不整脈でさえ、カテーテルでおせる時代がやってきました。しかし、いまだに我々が手にした最新の医療をもってしても手も足もでない病気がたくさんあります。我々の領域でも、原因不明で心臓の筋肉の動きが悪くなり、小さな子供でさえも心臓移植が必要となる拡張型心筋症という病気もその一つです。ここ10年、こういった病気の治療として臓器を再生しようとい

ったところみながなされるようになってきています（再生医療）。iPS細胞（人工多能性幹細胞）という名前を聞いたことがある方も多いと思いますが、2006年に京都大学の山中先生が発見した細胞で、あらゆる臓器になることができる可能性がある万能細胞として注目されています。今年は残念ながらノーベル賞候補となるものの受賞を逃しましたがいずれは必ずノーベル賞を受賞する本邦発のすばらしい発見だと思います。我々は、間葉系幹細胞といって、iPS細胞と違いからだの細胞から作るのではなく、もともとからだの中にある細胞ですが、これをからだから出して増殖させ、拡張型心筋症のみならず心筋梗塞の患者さんにも投与し心臓の筋肉の動きを回復させる研究を行っています。このiPS細胞や間葉系幹細胞をはじめとして、様々な自分のからだの細胞を使って、悪くなった臓器を再生することができたら、先天的（生まれつきもっている）な難病を含めて様々な病気が再生医療によって治療可能となる日がいつの日かくるかもしれません。もうすでに、日本の各地で、心臓、肝臓、脳、目、皮膚などに関する再生医療が開始されていますが、心臓で本格的に再生医療による治療が可能になるのは少なくとも10年はかかると思いますが…。我々は毎日自分の目の前の患者さんの診療に全力を尽くすとともに、大学病院の一員として将来の患者さんのメリットになるために絶えず研究を行い、その成果を発表しできるだけ多くの病気で苦しむ患者さんの役に立てればと考えていますのでよろしくご願ひ致します。

高度先端医療だけでなく、医療行為そのものを医療機器なしでは成り立たせることが困難な時代と言えます。そして、その医療機器を正しく上手に使うことと、医療機器を故障なく使える状態に保つことが医療施設の義務となっています。そのためには医療知識だけでなく、工学的知識を併せ持つ医療スタッフが欠かせません。そのようなニーズに応えるため、今から約20年前に臨床工学技士が誕生しました。臨床工学技士は、人間の呼吸・循環・代謝を代行する生命維持管理装置を操作・保守することを主な業務としています。具体的な例として、人工呼吸器、人工心肺装置、血液浄化装置、ペースメーカーや埋込型除細動装置、心電図モニター、輸液ポンプなど、多種に渡る医療機器を操作・管理しています。近年では医療関係者ではない一般の方も、AED（自動体外式除細動装置）を使用して人命救助を行う機会が増えてきていますが、そのAEDも全くメンテナンスフリーというわけにはいきません。病院などの医療施設では、多くの施設でAEDのメンテナンスを臨床工学技士が担っています。また現在、全ての医療機関において医療機器安全管理責任者を置き、医療機器の安全管理に努めなくてはならないことが法律で定められています。臨床工学技士は医療機器の安全使用にも大きく関わっており、多くの施設で医療機器安全管理責任者として活躍しています。臨床工学技士は、常に医療機器と人間（患者様や職員）の間を取り持ち、安全で高度な医療を患者様に受けて頂けるよう日々努力しております。



年末年始について

—お知らせ—

昭和大学藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院

年末年始の外来診療を下記の通り休診とさせていただきますので、ご案内致します。



- 平成23年12月29日～平成24年1月3日（火）⇒ 休診
- 平成24年1月4日（水）⇒午後3時までの診療となります。

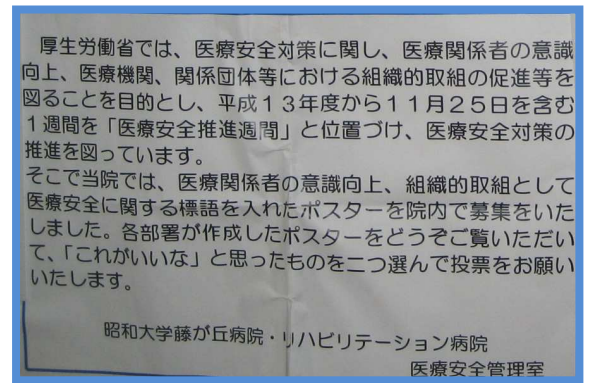
医療安全週間の取り組みについて



「あきらめない患者の気持ちによりそって…」 「浮ついた心は医療のイエローカード」など、昭和大学藤が丘病院、昭和大学藤が丘リハビリテーション病院では、医療安全週間の取り組みとして、「医療安全いろはカルタ」を初めて作り、11月14日から21日まで、1階のロビーに掲示しました。自身がひやりとした体験や他の医療機関での事故の情報などを基に、全部署から文案の入ったイラストを募りました。危険を感じた経験を共有するほか、研修などで活用していく予定です。実際に、メディカルリスクマネジメント委員会でのカルタ取りを平成24年1月に企画しています。

厚生労働省は、11月25日を含む1週間を同週間と定めています。かるた作りは、当院の医療安全管理委員会で立案、A4サイズで61枚のカルタが集まりました。各部署の看護師、放射線科技師、臨床工学技士、薬剤師、事務職員等が色鉛筆やサインペンでイラストを手描きしたり、パソコンで作成したものです。患者様、職員の投票で、優秀賞を決定し、1年間の医療安全ポスターとしても掲示します。

医療安全管理者として、「医療安全いろはカルタ」に患者様や見舞客にも医療安全に関心を持ってもらう事と、一緒に共同して安全活動を実施していくという、患者参加型の医療安全の一步となることを期待しています。手順やマニュアルばかりではなく、楽しみを入れながら、医療チーム全体で医療の質・安全の向上を目指していきます。



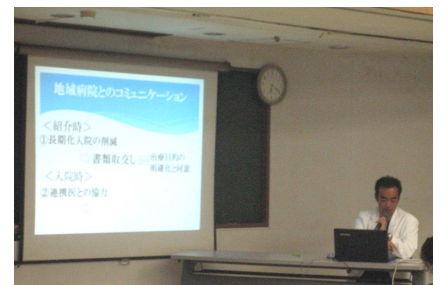
昭和大学藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院ワークショップ報告会について



7月に『ベッドコントロール』をテーマにワークショップを開催し、グループごとに検討した問題点への対策について、グループワークで具体的な運用案が策定され、平成23年9月7日(水)・12月6日(火)に報告会を行いました。また、平成24年3月に成果発表会を行う予定です。

グループ別テーマ

- ① 多職種における患者情報を共有し退院促進を図るシステムと運用強化
- ② 「退院支援アセスメントシート」の整備と運用システム作成と強化
- ③ 総合相談センター・入院センター・地域連携室の一元化を図る
- ④ 院内決定事項等を周知徹底するためのシステムの構築
- ⑤ 藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院の円滑な転入院システム作成と強化
- ⑥ 適正な差額ベッド減免に関わるシステムと運用強化



クリスマスツリーを飾りました

12月に入り、寒さが厳しくなると同時にクリスマスシーズンとなりました。藤が丘病院・藤が丘リハビリテーション病院ではクリスマスの時期が近づいてくると正面玄関にクリスマスツリーを飾り始めます。ぜひご覧ください。



税の相談会を行いました

東京地方税理士会より、平成23年11月11日～11月17日を『税を考える週間』として藤が丘病院1階憩いの広場前にて「税の相談会」を開催いたしました。東京地方税理士会緑支部職員の4名の方にお越しいただき、当日は午前10時より午後4時まで100名近くの方が相談されました。『適切なアドバイスをもらえてよかった』といった声を頂き、職員をはじめ、多くの方より相談があり、身近な税金相談から相続税等と幅広く話を聞ける「相談会」だったようです。



【診療統計】2011年9月～10月()内は1日平均

	藤が丘		リハビリ	
	9月	10月	9月	10月
外来患者数	33,133人(1380.5人)	33,393人(1,335.7人)	5,404人(216.2人)	5,961人(238.4人)
入院患者数	14,835人(494.5人)	14,814人(477.9人)	5,435人(175.3人)	5,845人(188.5人)

編集後記

空気が澄んで天気の良い日はちょっと高いところから富士山がよく見えます。富士の白装束が段々と厚くなるに従い、私たちの着ている服も同じように厚くなっていくようです。2011年は原発事故による節電等で災害やエネルギーの大切さなどを深く考えさせられる1年でありました。今年の冬はちょっと1枚多く重ね着を試みたり、健康のためにも軽い運動や散歩を試みたり。

富士の見える高台までお散歩してみると暖まるかもしれませんね。そして富士に向かって年の無事を祈ることもお忘れなく。(庄司 博)

広報委員 三邊武幸 末木博彦 吉村吾志夫
谷山松雄 池田裕一 田口清 高橋良昌
上ノ宮彰 西山謙一 岩田香苗 吉原利栄 伊藤久美
高橋良治 庄司博 佐藤薫 渡邊哲
太田麻美 豊巻美里 (順不同)